

## アーレントのマルクス「誤読」に関する一考察——労働・政治・余暇

京都大学 人間・環境学研究所 博士後期課程 百木 漢

『人間の条件』…「労働 labor」「仕事 work」「活動 action」の三つの営みを区別

→比較的「活動」を高く評価、「労働」を低く評価(ただしいずれも人間に不可欠な営み)

・とりわけアーレントの労働論に着目…これまで主題的に取り上げられることは少なかった。

→アーレントによるマルクス(の労働思想)批判がベースとなっている。

→アーレントの否定的労働観とマルクスの肯定的労働観の対比

『カール・マルクスと西欧政治思想の伝統』(1953→2002)

…『全体主義の起原』第一版(1951)発表後のアーレントは一時期マルクス研究に没頭。その研究成果としてまとめられたのが本草稿。生前中には未発表であったが、2002年に *Social Research* 誌に掲載され、また日本では佐藤和夫氏らの編集・翻訳によってまとめられた。

→『全体主義の起原』と『人間の条件』を繋ぐミッシング・リンク (Canovan 1992)

→とりわけアーレントの労働観、マルクスの労働思想への批判を知るうえで興味深い内容

cf. 佐藤和夫・尾関周二・吉田俊傑編『アーレントとマルクス』(2003)

・西欧の伝統思想においては、「労働」は苦痛の営みであり、忌避と軽蔑の対象であった。

→しかし近代以降、「労働」の地位が急上昇し、労働こそが社会の中心的な営みとなった。その肯定的労働観の頂点にいたるのがマルクスである(ロック、スミスと並んで)。それゆえ、マルクスの労働思想は西欧政治思想の伝統への「反逆」を意味するものであった。

・近代の労働中心主義が「活動」「仕事」の衰退、および「世界」からの疎外をもたらした。

→全体主義運動の支持者となったのは〈労働する動物〉としての「大衆」である。〈労働する動物〉の勝利した時代に登場したのが全体主義(「イデオロギーとテロル」論文)。近代における「労働」の中心化こそが全体主義登場の遠因のひとつである。(森川 2010、百木 2013)

### ◆アーレントが批判する「マルクスの最大の矛盾」

「マルクスの労働に対する態度、したがって彼の思想のほかならぬ中心的概念にたいする態度は、終始一貫して多義的である。労働は『自然によって押しつけられた永遠の必要』であり、人間の活動力の中で最も人間的で生産的である一方、革命は、マルクスによれば、労働者階級を解放することではなく、むしろ、人間を労働から解放することを課題にしている。つまり、労働が廃止されるときにのみ、『自由の王国』が『必然の王国』に取って代わるのである」(HC p.104, 160 頁)

→マルクスは「労働を賛美」しつつ、「労働からの解放」を理想としている。

「このようなはなはだしい根本的な矛盾は、むしろ二流の著作家の場合にはほとんど起こらないものである。偉大な著作家の作品なればこそ、かえって矛盾がその作品の核心にまで導入されるのである。」(HC p.104-105, 160 頁)

※津戸正広(2001)やSayers(2007)による批判。マルクスはあくまで「物質的生産活動つまり労働を終えた時点から、自由な活動のための時間が始まる」と述べていたのであって、アーレントが解釈するように「労働が廃止されるときにのみ、『自由の王国』が『必然の王国』に取って代わる」と述べていたわけではない。マルクスが主張しているのは、「必然の王国」の短縮によってのみ「自由の王国」が拡大しうることであって「労働全般の廃棄」ではない。

「じっさい自由の王国は、窮乏や外的な合目的性に迫られて労働するということがなくなったときに、はじめて始まるのである。つまり、それは、当然のこととして、本来の物質的生産の王国の彼方にあるのである。(中略)自由のこの王国のなかではただ次のことがありうるだけである。すなわち、社会化された人間、アソシエイトした生産者たちが、盲目的な力によって支配されるように自分たちと自然との物質代謝によって支配されることをやめて、この物質代謝を合理的に規制し、自分たちの共同的統制のもとに置くということ、つまり、力の最小の消費によって、自分たちの人間性に最もふさわしく最も適合した条件のもとでこの物質代謝を行うということである。しかしこれはやはりまだ必然性の王国である。この王国のかなたで、自己目的として認められる人間の力の発展が、真の自由の王国が始まるのであるが、しかし、それはただかの必然性の王国をその基礎としてその上にのみ花を開くことができるのである。労働日の短縮こそは根本条件である。」(マルクス『資本論』第三巻、MEW Bd.25 S.828、強調引用者・以下同様)

→マルクスの「労働 Arbeit」概念には生命維持の手段以外にも自己実現や社会的関係の形成、創造的製作など多様な意味が含まれていたのに対し、アーレントは「労働 labor」概念を生命維持の手段に限定して捉えていたが故に、労働概念の差異(ズレ)が生じていた<sup>1</sup>。この点でアーレントがマルクスを「誤読」していたことは間違いない。しかし、この「誤読」(強引な読み替え)のうちこそ、アーレント思想の最も重要な特徴が表れているのではないか。

→アーレント自身の言葉をもじっていえば、「このようなはなはだしい根本的な誤読」のうちこそ、アーレント思想の核心が隠れているのではないか。

マルクスの理想:「資本の偉大な文明化作用」によって産業の生産力が向上し、必要労働時間が短縮され、自由時間が増大する。その自由時間において、万人が個性と能力を全面開花する「高度な活動」を実践できるようになり、「社会的個体」という新しい主体に生まれ変わる。(cf.『経済学批判要綱』)

→マルクスだけでなく、労働中心の近代社会が根本的に有している理想。

「マルクスをはじめ、さまざまな労働運動にたずさわっていた人々を鼓舞した希望は、自由な時間は、ついには人間を必然から解放して〈労働する動物〉を生産的にするだろうというものがあった。」(HC p.133, 194-195頁)

→アーレントが問題としたのは、単にマルクスが「矛盾」していることだけでなく、「労働からの解放」というユートピアそのものであったと考えねばならない。

<sup>1</sup> アーレントの labor とマルクスの Arbeit に概念的差異については、Bakan (1977)、Parekh (1997)、吉田・佐藤・尾関 (2003)、百木 (2010) など多数の先行研究があるので、そちらを参照されたい。

#### ◆「労働」と「政治」からの「二重の解放」

・『カール・マルクスと西欧政治思想の伝統』におけるマルクス批判から見えてくるもの

→『人間の条件』などの著作では示されていない興味深い論点を提示している。

「マルクスの理想社会では、労働と政治という異なる二つの概念が分かちがたく融合している。すなわち、階級も国家もない社会は、古代の一般的条件である**労働からの余暇**だけでなく、**政治からの余暇**をも実現する。この政治からの余暇は、**統治や政治的活動が『事物の管理』(エンゲルス)に置き換えられたときに到来すると考えられる。この労働と政治からの解放という二重の意味をふくんだ余暇**は、哲学者たちにとって、観想的生活 *bios theôrêtikos* の条件であった。」(KM 129 頁)

→マルクスのいう余暇は、「労働からの解放」と同時に「政治からの解放」という意味を含む。

それは、古代ギリシアの「スコレー *scholé*」や古代ローマの「オティウム *otium*」という用語に示される伝統的な余暇概念を継承したものである<sup>2</sup>。

→実際にマルクスがスコレー／オティウムなどの伝統的な余暇概念を継承したものであることを明確に根拠づけることは難しい。これもまたアーレントによる「誤読」または「強引な解釈」であるが、この「誤読」が意味しているものは何か。

→むしろ伝統的な余暇概念に依拠し、これにこだわっているのはアーレントのほうではないか。アーレントの批判対象はマルクスの労働思想だけでなく、「活動＝政治」を軽視し「観想＝哲学」を重視してきた西欧政治思想の伝統にまで及んでいると捉えなければならない。全体主義の思想的起源をたどるならば、マルクス思想にとどまらず、西欧政治思想の端緒にまで遡らねばならないとアーレントは考えていた<sup>3</sup>。歴史研究的側面が強い『全体主義の起源』から政治哲学的側面が強い『人間の条件』へと彼女の研究がシフトした理由もここにある<sup>4</sup>。

・さらに「労働と政治からの二重の解放」という理想が、統治や政治が「事物の管理」に置き換えられたときに実現されるという解釈。つまりマルクスは古代的余暇観を引き継ぎつつも、その理想を労働生産力の向上によって実現しようと考えていた点ではすぐれて近代的であった。「階級も国家も労働もない社会というユートピア的な理想は、およそ非ユートピア的な二つの要素が婚姻して生まれたものである。すなわち、伝統の枠組みではもはや理解することのできない現在の趨勢についての認識と、それを彼が理解し統合する際に用いた伝統的な概念や理想との婚姻の産物である。」(KM 130 頁)

<sup>2</sup> 『過去と未来』所収の論文「過去と伝統」においても、マルクスが西欧思想の伝統に「反逆」しつつも、同時にあくまでその概念枠組みが西欧思想の伝統にとらわれていたことが強調されている。

<sup>3</sup> 『カール・マルクスと西欧政治思想の伝統』の冒頭部において、アーレントは「マルクスに全体主義の責めを負わせることは、西欧の伝統それ自体が全体主義という巨大な新しい統治形態に必然的に帰着すると非難することにつながる」(KM p.276, 9 頁)として、安易にマルクスを全体主義の父と見なそうとする当時の知識人たちを批判し、西欧政治思想の伝統にまで遡って考察する必要性を説いている。

<sup>4</sup> そもそもアーレントのマルクス研究は、『全体主義の起源』第一版発表後、「全体主義のマルクス主義的起源」を探る目的で始められたものであった。しかし研究が進むにつれ、アーレントはマルクスの〈労働する動物〉という人間の定義こそが、近代社会を性格づけ全体主義をもたらした最大の要因のひとつであることを見出し、その思想的起源を遠くソクラテス学派にまで遡る研究が開始されたのであった。その研究成果の途中報告としてまとめられたのが『カール・マルクスと西欧政治思想の伝統』であり、さらにその完成形が『人間の条件』であったと見ることができよう (Bruehl 1982, p.279, 378 頁)。

- ・マルクスのユートピアは古代ギリシアのアテナイ（支配するものと支配される者の区別がなく  
なり、労働がなんらかの形で廃棄され、ほぼ無限の余暇が社会の各成員に保証される社会）を  
モデルとしたものであるとアーレントは述べているが、ここでもむしろ古代ポリスをモデルと  
して思想を組み立てていたのはマルクスよりもアーレントのほうだったのではないか。

「その意味でそれ〔引用者注：マルクスのユートピア〕は、時間的、空間的な場所をもたないユ  
ートピアではなく、むしろ、プラトンやアリストテレスにとっての経験のモデルになったのと  
同じアテネの都市国家の政治的、社会的条件を再現しており、したがってまた、われわれの  
伝統が立脚している政治的経験の基礎を再現している。」(KM 128 頁)

「このような希望を導いたモデルは、マルクスの場合、疑いもなくペリクレスの時代のアテ  
ナイであった。そしてマルクスのアテナイは、将来、人間労働の生産性が著しく高められる結  
果、自らを維持するのに奴隷を必要とせず、万人にとってリアリティとなるようなアテナイ  
であった。」(HC p.133, 195 頁)

- ・そうであるとすれば、アーレントはなぜ、生産力の向上によって人間を必要労働から解放し、  
それによって生み出される自由時間を「高度な活動」に充てるというマルクスのアイデアを批  
判したのだろうか？むしろそのような未来社会こそ、古代ギリシアでは限られた自由市民にし  
か与えられなかった「活動」の特権を万人に普遍化する理想を実現するものではないのか。
  - ・アーレントにとっての理想的な余暇のあり方は「労働と政治からの二重の解放」ではなく、「労  
働からの解放と政治への参加」にあったと考えられる。余暇において取り組まれるべきは「観  
照」でも「消費」でも「自己目的としての労働」でもなく、「活動＝政治」である。
- 「労働と政治からの二重の解放」という理想が全体主義へ接近するという危機感。

#### ◆「事物の管理」によるユートピアの実現？

「マルクス自身は、彼のいわゆるユートピアをたんなる予言と見なしていた。そしてたしかに、  
彼の理論のこの部分については、われわれの時代になってようやく姿を現わした多くの発展と  
符合している。古い意味での統治は多くの点で行政に席を譲り、産業化されたすべての国々  
で余暇は大衆的な規模で増大しつづけている。産業革命とともに到来した時代に内在してい  
る固有の趨勢を彼ははっきりと認識していた。ただし、そうした趨勢が生産手段の社会化とい  
う条件のもとで初めて顕在化するという仮定は誤っていたが。」(KM 130 頁)

→マルクスの理想主義を批判しつつも、彼の予言が近代社会の現状分析としては的確であったこ  
とを認めている。(マルクスが理想とした)「労働と政治からの二重の解放」が実現される過  
程は、すなわち「統治が行政に席を譲る」過程である、とアーレントは解釈していた。

→これこそアーレントの批判点であった。たとえ生産力の向上によって、人間が「労働」から解  
放されたとしても、それと同時に人間が「活動＝政治」からも解放されてしまうのであれば、  
我々は本来の「人間の条件」を欠いた存在（動物的存在）となってしまうのではないか。

→アーレントが理想としたのは「労働と政治からの二重の解放」ではない。「労働」も「政治＝  
活動」も共に人間にとって欠くべからざる営み＝「人間の条件」である。

「マルクスもレーニンも犯した最も致命的な誤りのひとつは、この「事物の管理」を支配がないことだと誤解し、それが、普遍的平等という条件のもとで、誰もが支配されることもなく支配者でもない共通世界、古代の都市国家をもとにして好んで心にとめていたような共通世界を保証するだろうと信じたことである。」(KM 270 頁)

- ・マルクスやレーニンが「事物にたいする脱人格化された支配が可能であり、支配一般に取って代わることができるという誤り」に陥った理由は、彼らが伝統的思考に縛られていたことにある。「西欧政治思想の伝統においては、『生命の必要性を管理する』ことによって労働からの解放を達成することが正当化されてきたため、今やその必要性の管理を人間の代わりに機械が行なっているように思われたので、彼らには、管理がすべての人間を自由にするだろうと思われたのである。」(KM 270 頁)

→マルクスが伝統的な余暇概念を引きずっていたことが、「事物の管理」という理想に繋がっている、という解釈。これもまたマルクス解釈としては大いに問題を含んでいるが<sup>5</sup>、ここにも、西欧政治思想の伝統・マルクスの労働思想・全体主義の三者のうちに連続する思考様式(「活動＝政治」を軽視し、「労働と政治からの二重の解放」を人間の理想状態と見なす)を見出そうとするアーレント思想の特徴が強く表れていると見ることができる。

#### ◆「無人支配」という新しい専制支配

- ・官僚制の普及によって「諸個人の統治」が「事物の管理」に取って代わられる結果としてもたらされるのは、「無支配 no rule」ではなく「無人支配 no-man rule」である。すなわち統治支配の人格的要素が脱色され、国家－機関が単なる行政機能を引き受けるような統治形態である。

- ・「社会が完全に勝利」した際にもたらされる「無人支配 no-man rule」≠「無支配 no-rule」<sup>6</sup>  
→「統治 government」が人格的要素を失った「行政 administration」(＝官僚制)と化す。

「それは、支配される者たちにとって、一人の誰か〔somebody〕という幽霊のような外観をまとう無人〔nobody〕による支配なのである。そして、本物の官僚制においては、すべての人々が支配されている常態にあり、つまり自由はすっかり消滅してしまうのである。(中略)…それが「国家の死滅」という教説において予言しているのは、無人による支配であり、誰もいないような誰かによる専制的支配なのであって、それゆえその前では、それ以外の者はすべて誰でもない者へと離散してしまうのである。」(KM 273 頁)

「実際、それはある環境のもとでは、最も無慈悲で、最も暴君的な支配の一つとなる場合さえある。」(HC p.40, 63 頁)

<sup>5</sup> 近年のマルクス研究で盛んなアソシエーション論などを参照すれば、マルクスが理想とした共産主義社会がかつてのソ連や中国のような国家社会主義ではなく、自発的に形成されるアソシエーション(結社)によって構成される自律的社会であったことは明白である。まして、「事物の管理」に政治や社会の運営をすべて任せてしまうような状態をマルクスが理想としていたのではないことは明らかである。(田畑稔『マルクスとアソシエーション』(1994)、大谷禎之介『マルクスのアソシエーション論』(2011) 参照)

<sup>6</sup> 「社会的なもの」との関連で以下の記述も参照。「社会が完全に勝利するとき、必ず、ある種の『共産主義の虚構』が生み出されるだろう。このような虚構の顕著な政治的特徴は、社会が誰によっても支配されていないということである。私たちが伝統的に国家とか政府とか呼んでいるものは、ここでは純粋な行政に席を譲る。これは、マルクスが正しくも『国家の死滅』として予言していたような状態である。ただマルクスは革命がそれをもたらしようと仮定していた点で誤っていたし、社会がこれほど完全な勝利を取れば、ついに『自由の王国』が出現すると信じていた点では、なおさら誤っていた。」(HC p.44, 68-69 頁)

→明らかに全体主義支配がイメージされている<sup>7</sup>。「統治」が脱人格化された「行政」へと変容することによって、「無人支配」という新しい専制支配＝全体主義支配が導かれる。労働中心社会の出現および大衆消費社会の成立と官僚制の普及がその目印。

「完璧な官僚制、それは厳密にマルクス主義的な概念に導かれた革命によって出現することになったのだが、実際には変装した一種の一人 (one-man) 支配である。」(KM 272 頁)

- ・官僚制は「労働社会の政治体」であり、そのなかでは「労働」が「仕事」や「活動」に取って代わる。結果として残されるのは「自然との物質代謝という面での人間の生命の単なる機能」のみである(近代人の「動物化」の進行)<sup>8</sup>。そして、生命 life 維持を至上価値とする〈労働する動物〉＝「大衆」によって担われる全体主義運動が登場した(「イデオロギーとテロル」)。「大統領や国王や首相でさえ、自分たちの公務を社会の生活に必要な賃仕事 job であると考え、知識人の中では、自分たちの行っていることを生計としてではなく、仕事として考えるただ孤独な個人だけが残る。私たちが直面しているのは、労働者に残された唯一の営みである労働のない労働者の社会という逆説的な見通しなのである。もちろん、これ以上悪い状態はありえないだろう。」(HC p.5, 15 頁)

#### ◆近代的労働 (leisure) と古代的労働 (scholé・otium) の相違

- ・今日の「余暇 leisure」は、古代の scholé や otium と全く異なる性格を持つものである。
- scholé や otium が労働と政治からの解放を意味したのに対し、現代の余暇 leisure は基本的に「消費」のための時間である。すなわちそれは「労働時間」の裏返しにすぎない。
- ・マルクスは資本主義の発展に伴って生産力が十分に向上すれば、人間はやがて労働から解放され自由になるであろうと予想していたが、その予想は完全に誤りであった。なぜなら〈労働する動物〉の余暇時間は「消費以外には使用されず、時間が余れば余るほど、その食欲は貪欲となり、渴望的なものとなる」からである (HC p.133, 195 頁)。
- ・資本主義経済の発展は決して「労働からの解放」をもたらさず、むしろ「労働－消費への束縛」をもたらすとアーレントは考えていた。その端的な表われが大衆消費社会の到来である。大衆消費社会のなかで我々の経済全体が「浪費的」なものとなりつつある。
- ・「この経済においては、過程そのものに急激な破局的終末をもたらさないようにするために、物が世界に現われた途端に、今度はそれを急いで貪り食い、投げ棄ててしまわなければならない」(HC p.134, 196 頁)。そして、そのような社会では「私たちはもはや世界に生きているのではなく、ただ、一つの過程に突き動かされているだけだということになる」(.ibid)。

<sup>7</sup> 「たしかに支配者の空っぽの椅子を占拠しているのは誰もいないのだが、この誰もいないことは、支配される側から見れば、きわめて効果的で専制的にさえ支配するのである。その誰もいないことは、支配される側から見れば、きわめて効果的で専制的にさえ支配するのである。(中略) 独裁者の恣意的決定にかかわってわれわれが目にしてるのは、普遍的手続きによる偶然の諸決定であり、それに悪意も恣意性さえもない。なぜなら、その決定の背後には意志がなく、しかしそれゆえ訴えかけるものがないからである。支配される側に関するかぎり、彼らがとらえられている官僚的形態の網の目は、誰かが意志をもって行う支配に比べると、おそらくより致命的で危険でさえあるだろう。」(KM 272 頁)

<sup>8</sup> 近代人の動物化への懸念を示す記述として以下の文章に注目。「しかし、もう一つ、もっと重大で危険な兆候がある。それは、人間がダーウィン以来、自分たちの祖先だと想像しているような動物種に自ら進んで退化しようとし、そして実際にそうなりかかっているということである」(HC p.322, 500 頁)。

・アーレントは、マルクスの「社会的人間 *gesellschaftlich Mensch*en」を「生命過程の力」に屈服した動物的存在であると理解している<sup>9</sup>。これもまた明白な「誤読」であるが<sup>10</sup>、その原因はアーレントがマルクスの理想社会と全体主義を等置して捉えようとしていたことにある。

「社会化された人類というのは、ただ一つの利害だけが支配するような社会状態のことであり、この利害の主体は階級かヒトであって、一人の人間でもなければ多数の人々でもない。(中略)残されたものは『自然力』、つまり生命過程そのものの力であって、すべての人、すべての人間的活動力は等しくその力に屈服した…。この力の唯一の目的は——目的がともかくあるとして——動物の種としての人間の生存であった。」(HC p.321, 499 頁)

→生物種としての人間の存続を至上命題とする運動…ナチスのホロコーストを想起させる。

→アーレントのマルクス批判(誤読)の背景には全体主義への批判という動機が強く働いていたことを理解する必要がある。「同一的」な大衆＝〈労働する動物〉と「社会的人間」を等置。

#### ◆共産主義のユートピアと全体主義のディストピア

「マルクス以後百年たってみて、私たちは、この推論が誤っていたことを知っている。つまり、〈労働する動物〉の余暇時間は、消費以外には使用されず、時間があまればあまるほど、その食欲は貪欲となり、渴望的になるのである。(中略)近代世界は、たしかに必要〔必然〕にたいして勝利を収めた。しかし、その勝利は、労働が解放され、〈労働する動物〉が公的領域を占拠してはじめて獲得されたものである。この問題のいささか不安な真実はこの点にある。しかもなお、〈労働する動物〉がそれを占拠し続けている限り、真の公的領域はありえず、ただ私的な営みが公然と示されるだけである。その結果、生まれているのは、遠回しに大衆文化と呼ばれているものである。」(HC p.133-134, 195-196 頁)

→たとえ労働生産力が向上し、必要労働時間が減少したとしても、マルクスが理想としたような「自由の王国」は訪れない。結果的に増大した余暇時間は「消費」のために使用されるのであり、それは労働—消費—労働—消費…という資本主義の無限循環運動をいっそう駆動させるのに資するだけである。どこまでいっても「労働」から自立した「活動」は実現されない。

「マルクスが理解しなかったこと——そして彼の時代には理解できなかったこと——は、共産主義社会の萌芽はすでに国民的家族<sup>ナショナル・ハウスホルド</sup>の現実の中に現われているということ」(HC p.44, 68 頁)。

→「労働と政治からの二重の解放」というマルクスが思い描いたユートピアは、共産主義革命を経ずともすでに部分的には近代社会において実現されつつある。機械の発明などによって労働の苦痛は以前に比べれば確実に減少しており、過去に比べれば人類は「労働から解放」されつつあるようにも見える。しかし、それは決して喜ばしい事態ではなく、むしろ近代社会において人間はより労働と消費の無限サイクルに従属しつつある、とアーレントは認識していた。

<sup>9</sup> マルクスの「類的存在」を「種」という同一性に還元された動物的存在と捉える記述も存在する。「この場合、人間はもはや、自分自身の生存のみにかかわる個人として活動するのではなく、「種の一族」として、つまりマルクスがよく言っていたように類的存在として活動する。」(HC p.116, 120 頁)

<sup>10</sup> マルクスのいう「社会的人間(個体)」とは、未来社会において諸個人が各自の能力と個性を全面開花させた後に到達する「新しい主体」のあり方を指している。決して生命維持のみを至上命題とする「同一的」存在ではない(MEGA II 1.2 S.581)。

「近代における労働の解放は、万人に自由を与える時代をもたらさないだけでなく、反対に、全人類をはじめて必然の軌のもとに強制するという危険は、すでにマルクスによってはっきりと感じられていた」(HC p.130, 192頁)

「それに伴って、余暇 (leisure) という重大な社会問題が起こってくるだろう。この余暇の問題というのは、本質的には、消費能力を完全に維持するために、いかにして日々の消耗に十分な機会を与えるかという問題にほかならない。苦痛なき消費、努力なき消費は、生物学的生命の貪欲な性格を変えるのではなく、それを増大させるのである」(HC p.131, 193頁)

→近代社会では、公的領域が「労働」に占拠されているために、労働生産力が向上した結果として余暇時間が増加したとしても、その余暇が「活動」や「観照」のために使われることはなく、ただ「労働」の裏面としての「消費」に使われるのみである。「活動」や「公的領域」はますます衰退していき、「行政＝管理」としての政治が社会を覆い尽くすこととなる<sup>11</sup>。

→この「動物化」した「大衆」を管理する政治体として官僚制が出現するのであり、この脱人格化された「事物の管理」が「誰でもない者による支配」としての全体主義支配を出現させる。

#### ◆結論

従来のアーレント研究では、彼女の余暇論に着目した研究はほぼ皆無であった。確かにその記述が極めて限定されたものであるとはいえ、アーレントが近代社会における「余暇」のあり方について考察をめぐらしていたことはもっと注目されるべき。当然にそれは「余暇」の裏面である「労働」論とセットで議論されねばならない。生命維持に最大の価値を置く〈労働する動物〉としての近代人＝「大衆」に対応して登場してきた「事物の管理」としての政治＝全体主義支配に抗うためには、「活動」としての「政治」を取り戻さねばならず、本来の余暇はそのような「活動＝政治」に充てられるべきものであったとアーレントは考えていた。

しかし、プラトン以降の西欧思想の伝統においてはそのような余暇の理想が失われ、余暇は〈活動的生活〉から距離をとった「観照」のために用いられることが理想とされた。近代に入ってこれを転倒したのがマルクスであり、彼は労働生産力の向上とともに生み出される自由時間が「自己目的としての労働」に費やされる理想を思い描いた。しかしアーレントからしてみれば、この両者とも「労働と政治からの二重の解放」を理想とし、「活動＝政治」を軽視する点では共通しており、それは全体主義の思想に通ずるものであった。このような思想的解釈は相当にユニークかつ強引なものであり、幾重もの「誤読」に基づくものであると思われるが、近代社会では余暇までもが労働と消費の無限循環に取り込まれているがゆえに、たとえ労働生産力が向上して余暇時間が増大したとしても、マルクスが理想とした「自由の王国」は訪れず、「活動」や「公的領域」がいっそう衰退する事態につながり、それに代わって「行政＝管理」としての全体主義支配が出現するというアーレントの洞察は、今日なお有効性を持つものであるように思われる。労働・政治・余暇のあり方について我々は今一度、再考を求められているのではないだろうか。

<sup>11</sup> 近年、このようなアーレントの近代政治論をフーコーの生権力論に通ずるものとして考察する研究——近代政治では人間の生物学的身体が「統治」(アーレントのいう「行政」)の対象となるという分析——が目立ちつつある。アガンベン(2003)、Braun(2007)の議論などを参照。



## 参考文献

- アガンベン、ジョルジョ、2003、『ホモ・サケル——主権権力と剥き出しの生』高桑和巳訳、以文社。
- Arendt, Hannah, [1951] 1973, *The Origins of Totalitarianism* (New edition), Harcourt Brace. (=1981、大久保和郎ほか訳『全体主義の起原』新装版、みすず書房。)
- , 1953, “Ideology and Terror: A Novel Form of Government”, *The Review of Politics*, vol.15 no.3, pp. 303-327.
- , 1958, *The Human Condition*, The University of Chicago Press. (=1994、志水速雄訳『人間の条件』ちくま学芸文庫。) [HCと略記]
- , [1953] 2002, “Karl Marx and the Tradition of Western Political Thought”, *Social Research*, vol.69 no.2, pp.273-319. (=2002、佐藤和夫編訳『カール・マルクスと西欧政治思想の伝統』大月書店。) [KMと略記。注：英語文献がない箇所は邦訳ページ数のみを記した。]
- , 1961, *Between Past and Future: Eight exercises in political thought*, Viking Press. (=1994、引田隆也・齋藤純一訳『過去と未来の間』みすず書房。)
- Bakan, Mildred, 1979, “Hannah Arendt's Concepts of Labor and Work”, *Hannah Arendt: the recovery of the public world*, ed. Hill, Melvyn A, St. Martin's Press.
- Braun, Kathrin, 2007, “Biopolitics and Temporality in Arendt and Foucault”, *Time & Society*, vol. 16 no. 1, pp.5-23.
- Canovan, Margaret, 1992, *Hannah Arendt: a reinterpretation of her political thought*, Cambridge University Press. (=2004、寺島俊穂・伊藤洋典訳『アレント政治思想の再解釈』未来社。)
- Marx, Karl, [1867]1962, *Das Kapital*, Bd.1-3, in Marx-Engels Werke, Bd.23-25, Dietz Verlag. 岡崎次郎訳『資本論』、大月書店・国民文庫版、1972年。
- 百木漠、2010、「アレントとマルクスの労働思想比較——近代的労働に関する一考察」『社会システム研究』第13号、99-111頁、京都大学人間・環境学研究所。
- 百木漠、2013、「<労働する動物>と全体主義—アレントのマルクス批判はいかなる思想的意義をもつか」、『社会思想史研究』第37号、95-114頁、藤原書店。
- 森川輝一、2010、『〈始まり〉のアレント——「出生」の思想の誕生』岩波書店。
- 大谷禎之介(2011)『マルクスのアソシエーション論—未来社会は資本主義のなかに見える』桜井書店。
- Parekh, Bhikhu, 1979. “Hannah Arendt's critique of Marx”, *Hannah Arendt: the recovery of the public world*, ed. Hill, Melvyn A, St. Martin's Press.
- Sayers, Sean, 2007, “The concept of labor: Marx and his critics”, *Science & Society*, vol.71 no.4, pp.431-454.
- 田畑稔(1994)『マルクスとアソシエーション——マルクス再読の試み』新泉社。
- 津戸正広(2001)「労働、仕事と自由な活動——人間の活動力をめぐるアレントとマルクス」『大阪府立大学経済研究』第46巻4号、1-11頁。
- 吉田傑俊・佐藤和夫・尾関周二編、2003、『アレントとマルクス』大月書店。
- Young-Bruehl, Elisabeth, 1982, *Hannah Arendt: For Love of the World*, Yale University Press. (=1999、荒川幾男ほか訳『ハンナ・アレント伝』晶文社。)